板戸沼のはなし

もと、「板戸沼」は今ある場所よりずっと奥の上手の方にあって、大きさも今の沼よりは比べものにならないほど小さな池コであったけど。

その池のそばに、白い猫と坊様（修験者と思われる）が、山のもの（山菜・きのこ・木の実）を採ったり、池で釣りをしたりして、仲よく静かに暮らしてえだっけどしゃ。

そしたどごろ、いつの時であったかわからないけれども、それまではよい天気であったのが、急に真っ暗になり大荒れの天気になって稲妻が光り、地鳴りがする、山鳴りがするなど激しくなり、今まで聞いたことのないほどの大きな響きがして今の沼が出来たんだど。

今までなかった大きな沼が山の中に出来たのでびっくりしてあたりを見回したところ、それまでは、のんびり暮らしていた坊様は、どこへ行ったがいなくなってえだっけど、それであちらこちらと方々探したけれどもやっぱり姿をみつけることができなかったどしゃ。ただ白い猫だけが沼の上に浮いている流木に乗って「ニャーニャー」と鳴いてえだけど。その鳴き声は、さもさも（本当に）悲しい鳴き声で聞いた人の耳からいつまでも離れなかったど。今まで一緒にいた坊様をこいしたって探してえだごったごどだべしゃ。

五、六日も鳴き続けでえだその白い猫が、「ニャー」と山中に響くほど大きな鳴き声を残して、どこさえったがわからなくなったけど。たぶん坊様のあとを追ってえだごどだべな。

これが「板戸沼」さある、むかしっからのはなしだ。

（小南イワノ口述）